

丸山眞男研究プロジェクト中間シンポジウム

コメント

聶 莉 莉

ご紹介いただいた聶莉莉でございます。今日のコメントは主として以下の五点からいたします。まず、コメンテーターである私と丸山眞男先生との関わり。次に、文化人類学者である私が丸山眞男に注目するきっかけ。三点目は、私の理解した研究者丸山眞男の姿勢と視座。四点目は、現在の中国の学界における丸山研究、これは區さんの話を少し補足させていただくこととなります。五点目は、報告者への質問です。

内容から見ますと、私のコメントはそれほど平石先生のご期待通りに進むものではないかも知れません。また、今日のご報告は、アメリカ・中国・韓国など広範囲に展開され、かつ多岐にわたっており、それぞれの内容に対応してコメントするのはとても私の力が及ばないことですので、それで、私なりの丸山理解を述べたうえで、基本的に自分自身の注目点に沿って報告者の皆様に質問させていただくというかたちで進めて行きたいと思えます。

まず一点目、コメンテーターである私と丸山眞男との関わりについて。

自分自身も、ここにこうして座っていることに不思議に思います。丸山眞男と何か関わりがあるかということ、残念ながら基本的にはありません。でも、全くないということでもなく、いわば熱心な学習者です。私の専門は文化人類学——基本的には東アジアおよび他の地域との比較を視野に入れながらの中国社会文化研究です。コメンテーターとして適任ではないかもしれませんが、一方私自身が熱心な読者であるということが、丸山眞男の学問が領域を越えて広く読まれていることの例証となるのではないかと思うのです。

一度、丸山先生にお目にかかったことがあります。まだ留学生であった一九八〇年代後半、中国社会科学研究会という留学生の組織があり、毎月六本木の国際文化会館で相互交流の例会があったのですが、區さんのお願いで丸山先生が講演にられました。それでお目にかかったのです。講演のテーマは当時私たちが非常に関心をもっていた、日本がなぜアジアの中でいち早く近代化の道を歩めたのかについてです。その理由に関して、丸山先生は、特に日本近世の社会構造と西洋の前

近代社会との類似性について分析をなされたことと記憶しています。

二点目、どうして人類学者である私が丸山眞男に注目したかということを少し申し上げたいと思います。さきほど區さんの話の中で、随分中国社会の背景が出てきました。私も日本留学以後、自らの思想に変化があり、様々な視点や研究方法論、特に文化人類学の社会を実証的に研究する方法を学んで、もう一度中国社会を考え直し、その底辺部や草の根から、中国社会をとらえ直す作業をしたくなりました。一村落の民族的な研究からスタートして、徐々に研究範囲を広げましたが、文革時代に育った世代として、どうしても自分の学問的研究を、革命とは何か、社会主義革命と制度は中国の歴史や中国の人々に何をもたらしたのか、長い歴史の中で培われた伝統をどのように評価したらよいかなど、重く背負っている問題意識と分けることができませんでした。ですが、日本の学術研究には、領域をわりと厳密に分類し、研究者が具体的なテーマについて実証的、より即物的に研究を行うことが傾向としてあります。また、日本で生活する中国人として、過去の戦争に関する記憶のあり方には日中の間に差が大きく、特に中国民衆の戦争被害記憶は長い間、中国においてさえも取り上げられてこなかったことをより深く実感しております。このような問題を取り上げると、学界では忌避されている「政治」の領域に入っておそれがあります。

このように、いわゆる学問的伝統と自分なりの問題意識とがぶつかることがたびたびあり、かなり苦悩した時期もありました。その時に、

第二回記念講演会の福田歓一氏の講演原稿を元に出版された『丸山眞男とその時代』を読みました。福田氏が紹介された丸山眞男先生の姿勢に共感を覚え、特に次の一文に感銘を受けました。

丸山先生の学問がいわば先生の時代との格闘の中で生み出された、と申しましたが、「時代との格闘」という言葉の意味については、先生ご自身の言葉をちよつと引用したいと存じます。わたくしども二人の指導教授でありました南原繁先生のライフ・ワークがようやく出版されたときに、丸山先生は『図書』という雑誌に『「フィヒテの政治哲学」を読んで』という一文を寄せられ、「超学問的な動機が厳密な学問的操作を推し進め、現代に対する切実な問題意識が純粹な歴史的研究と奥深いところで契合している見事さ」を特記されました（『丸山眞男とその時代』四頁）。

南原先生についての描写はまさに丸山先生ご自身の姿勢でもありません。「超学問的な動機」「時代と向き合っている知識人の課題の意識」、忘れられない責任感をもつ一方、どこまでも「学問的操作」、「純粹な歴史研究」として進めていく。時代の問題や課題に性急に短絡的に答えるのではなく、考察の厳格さ、思考の綿密さを重視する。学問の水準をキープしながらも、独自の問題意識を追究していく。そういう姿勢に私としては目を開かされたという感じがありました。

まさにこの一文に、丸山眞男先生の視座の特徴が映されていると思います。「超学問」と「学問」、現代の問題意識と歴史的研究、矛盾しあうような側面をあえて統一しようとする視座。これは、先ほど趙さ

んが言った、「白黒の尺度だけで切っていくという思想的な潔白さ」を最初から求めないというような物事の捉え方です。

この出会いをきっかけに、丸山先生に注目するようになり、いろいろな本を読んでいる際、人間を研究する人類学を専門とする者の職業的なクセかもしれないませんが、丸山の人間としての姿勢や、社会や歴史を考察する視点の特徴などに非常に関心をもつようになりました。

三点目に入ります。私の理解した丸山眞男先生の視座と方法論の特徴です。加藤節氏が第一五回記念講演会で、丸山眞男先生の生涯の仕事は三つの部分に分けられるとおっしゃいました。第一に、「明治維新の近代的側面」や徳川社会での「近代的要素の成熟」を跡付ける思想史的研究。第二に、戦後に始まり「日本の精神構造」や「日本人の行動様式の欠陥や病理の診断」とされた仕事。「超国家主義の論理と心理」「軍国支配者の精神形態」などが代表作。第三に、文化接触の型を規定する日本人の思惟構造の原型を探る仕事、日本文化の古層の探求。

今日のお三方の発表はどちらかというところ、より第二の部分に集中しているのではないかと思います。要するに、丸山の政治学的分析、啓蒙的言説、デモクラシー論、日本の政治体制に対する分析などと関連することです。そこで、この部分の仕事から見られる先ほど申し上げた、物事の矛盾し合う側面を統一的に捉えようとする丸山眞男の視座の特徴に関して、若干の例を提示します。なお、これは、丸山関連のいろいろな本から抽出したもので、それぞれの論点を提起した際の時

代背景や、具体的な経緯は省略することになります。

第一に、丸山の個人論について。今日の話、午前中の荏部先生の話にも、あるいは午後の油井先生、區さん、趙さんの話にも、よく出てきたのは「個人」であり、政治論という個人というものがすごく重要です。

私も長い間、個人と社会との関係に悩まされました。個人的な経験ですが、文革が終わった後、真っ先に意識したのは「これから私は自分の頭で考えてもだいたいようぶだ」ということで、解放感を味わった一方、同時に「私には考える力がない」、知識も方法論もないのだということに気づきました。喧伝されたイデオロギーのスローガンが過ぎ去った後、自分の頭の中に何がまだ残っているのか、「革命のネジ」として革命の「機械」のなかで育った人間は、機械が崩壊したらどうなるのか、と繰り返し自問しました。文革開始の際、まだ小学校五年生で、文革の一〇年間、学校教育らしい教育を受けたことがありませんでした。また、あらゆる文化や思想を排撃するような過激な思考様式に統制された政治体制の下で、思考に資する確実な知識や思考法に接することさえもできませんでした。したがって、文革が終わった後、自分が一個人として自立するためには、自ら「自己再造」をしなければならぬと切に思いました。このような強い危機感を覚えて必死に受験勉強をして、大学に入学しました。大学時代の専門は「人を聡明にさせる」と言われる哲学であり、自ら選んだ卒業論文の題目は「個人の価値を論じる」でした。もちろん、当時の自分の力ではうまく「論

「じる」ことができませんでしたが、それでも「個人の価値」を考えようとしたのです。非常に真剣に。

ですから、丸山眞男先生の「個人」に関する議論に私は非常に注目したのです。丸山の個人論の特徴は個人を論じる際に、必ず他者や、全体、関連性のあるものといっしょに論じることです。例えば、「国民一人一人の自立」と「他者」との連帯、「他者意識」との両立。

皆さんの発言でもこれに触れていましたが、丸山は国民一人一人の自立ということを重視します。その「自立」は、単に個々人の自立ではなく、他者意識と関連しているものです。丸山は、個人を尊重し、「自分と同じ人間は世界に二人としない——この自覚が精神的自立の最後の核」と述べる一方、どの個人にも、「どうしても入り込むことできない」ような、「その精神には到底外から体験できないようなリズムと起伏がある」他者が存在し、それと対話しながら自分が存在する、と指摘しています。

相手の思いをすぐに分かったつもりになる、安易な同情の態度を捨て、その人を「他者」として理解しようとしながら、対話を続けてゆく。その過程で、ひるがえって自分自身についても、その「かけがえのなさ」を、驚きをもって自覚することになるだろう。個人が、心の底にうごめく不定型なエネルギーにひきずられず、「精神的な自立」をしつかりと保つには、このような姿勢で、ほかの人々とのコミュニケーションを続けることが不可欠なのである（荻部直『丸山眞男——リベラリストの肖像』一七一頁）。

個々人が「他人と考えを異にする自由で」、そして自由な個人の間には、フランスの哲学者ヴォルテールの言ったような、「私はあなたの言うことに賛成はしないが、あなたがそれを言う権利を死んでも擁護しよう」という関係を築くことは、自由で民主主義な社会を実現する基本だと思われていました。

第二に、政治論に関しても、様々な重要な概念を関連する対立項とともに論じられました。

油井先生の話でも言及されましたが、政治的なプラグマティズム、リアリズムを丸山は重要視しました。「政治的リアリズムを国民の一人一人が自分のものにする必要」性や、「現実というものを固定した、できあがったものとして見ないで、その中にあるいろいろな可能性のうち、どの可能性を伸ばしていくか、あるいはどの可能性を矯めていくか、そういうことを政治の理想なり、目標なり、関係づけていく考え方」を提唱しました。

一方、原理へのコミットメント、政治的理想を忘れてはいません。第四回記念講演会の鶴見俊輔氏の話によると、丸山は「神なき人間の自由の荒涼たる世界」と本に書き込んだのです。虚妄だとしても理想としての戦後民主主義という理念に賭け、リアリズム一本でゆけば荒涼に達して危険だと考えました。ここには、「理想に憧れるだけでは済ませずに、目先の利害への固執にも陥らない、均衡のとれた態度」が見られます。

また、「国民一人一人の責任」を重要視する一方、その責任は単に個々

人の立場からのものではなく、政治の大局を内包するものだと指摘されました。「人民の一人一人が治者としての気構えと責任を持つところに、民主主義の本質がある筈です」、その責任の果たし方は、個別の利益への期待を超えて、みな「政治の全体性、総合性」を念頭において自分自身の意見を発していくものと唱えました。

そして、民主主義における多数者と少数者との関係について論じられました。第一三回記念講演会の三谷太一郎氏の話によると、丸山にとって民主主義は単なる「多数者支配」ではなく、「多数者」を一体的にもつ抽象概念としてでもなく、様々な「少数者」に分節化して具体的に捉えなければならぬものとして理解されました。丸山は「少数に分節化されない多数に対して強い抵抗感」をもち、「大衆民主主義に対して一貫して懐疑的、批判的」でした。「個人の自立性を脅かすのは国家権力だけではない。大衆自身の集団的力がそれを脅かす」。同質な多数者から分節化した「精神的貴族主義」を内面化する「少数者」を民主主義の主体とし、様々な「少数者」を束ねる求心力が民主主義において重要なのであって考えていました。

第三に、歴史に対して、理解的態度と批判的態度の両方をもつこと。「他者としての歴史」を「その他在において理解する」、もっぱら現代の感覚を投影して曲解してしまうことを慎重に避け、それぞれの時代の文脈に沿って、その内側から理解する態度で慎重に扱うというような歴史研究の視点を提唱されました。一方、それでもやはり容赦なく旧体制を批判する。「重臣イデオロギー批判」、天皇制批判、タブー

視されているような問題を丁寧に取り上げて、日本の政治的しくみのコアにある問題を避けずに目を向けて批判を展開しました。

第四に、人類学者として私が非常に共感を覚えるのは、丸山先生が個人的経験、リアルな体験を鮮明に心に留めて、しかも個人の経験にとどまらずに、国民の一人としての自分の経験を言語化、概念化し、政治体制に関する普遍的な問題として提起して、自ら経験した歴史から現在と未来の戒めを見いだそうとしていることです。

第四回記念講演会の鶴見俊輔氏は「一九三〇年代の恐怖の持続」という演題の講演において、丸山が高校生の時、唯物論研究会の講演会に出たことで警察に捕まって留置場に放り込まれたが、その時覚えた恐怖感が長く丸山から去らずに、「丸山さんの学問にとって大変大きな役割を果たしている」と言われました。

荊部先生が書かれた『丸山眞男——リベラリストの肖像』にも、丸山の個人的経験とその思想と関連について、いろいろと紹介されています。

例えば、召集された朝鮮での兵営生活の際、観察された朝鮮人の目に「滲み出た反感、怨恨のまなざし」を忘れられず、その深い印象は、戦後、植民地支配の責任に関する思考とつながりました。また、結核を患って入った結核療養所で、軽症患者として命がもはや救いようもない重症患者たちとの間に大きな隔たりが感じられたことから、他者意識が芽生えられたそうです。そして、丸山の母親が亡くなる前に、広島で被爆した丸山の安否を不安に思い詠んだ和歌を母親の死後読ん

で、自分の母親の不安の気持ちを日本中の母親に押し広げ、さらに進んで日本の国家体制に対する疑問を深めさせていったのです。丸山の母親の和歌に次のようなものがありました。「召されゆきし吾子^{あこ}をしのびて思ひ出に泣くはうとまし不忠の母ぞ」。母親は、子を思う切たる気持ちと自分は不忠の母だという、二つの感情の間に引き裂かれたまま亡くなりました。同様な気持ちを戦時中無数の母親が体験したことで、丸山は国民を苛む国家の体制に問いかけました。

要するに、「事過境遷」(事が過ぎると一切水に流す)的に妥協し忘却するのではなく、新しい状況に棹さすような二ヒリズムでもありません。自らの体験をしつかりと汲み上げて、それを文字化し、そこから概念を鑄造し、思想を広げることです。

第一回記念講演会の隅谷三喜男氏のおっしゃったように、丸山眞男先生の理性は感性とつながっている理性です。感性と理性、ここにも一対の関係性が見られます。丸山は「理性だけではなく感性を持つている。いわゆる冷たい理論ではなく、温かさをこめて社会現象、そこにおける人々の動きを見ていこうとする姿が非常に顕著に示されている」と隅谷氏はおっしゃいました。

総じて言えば、丸山眞男先生は、歴史や政治の変動性と継続性、個人・少数と全体・多数、個人の体験・経験・感性と概念・理性、リズム・その場その場の判断と理念・理想・一貫性、要するに相対性と絶対性、どちらにも絶対的な権利を与えないことです。常に相互に関連しながら、どちらにも他方と断絶的に捉えることのないような方

法論なのではないかと思うのです。

四点目に入りますが、中国における丸山研究。區さんが自らの体験とつなげながら丸山思想の中国にとつての意味を話されましたが、私は、中国における丸山研究はだいたいどういうものがあるかについてお話をいたします。

中国における丸山眞男研究は、一九八〇年代から翻訳本で始まりましたが、一九九八年に孫歌さんが「文学の位置——丸山眞男のジレンマ的矜持」という論文を発表して以後、大きな反響を呼んだこともあり、二〇〇〇年以降、研究論文や専門図書がより多く刊行されるようになりました。これらの研究は、大体五つの領域に分けられると思います。一つ目、日本の思想界における丸山研究——日本ではどのように研究されてきているかについて。二つ目、丸山思想に対する全体的把握——丸山にはどのような思想があるのかについて。三つ目、丸山の近代主義に対する分析。四つ目、丸山の日本文化・古層分析に対する把握。五つ目、丸山の自由主義、民主主義、市民社会思想に対する研究。

五点目、三人の報告者の方々に対する質問ですが、お三方の発表はそれぞれ主旨や論点が明瞭に提示されていますので、私がそれらをまとめる必要もないと思います。直ちに質問に入らせていただきます。

まず、油井先生に対して二つ質問させていただきます。まず一点目、油井先生は、丸山先生がドイツ思想を中心に学んだと理解されたうえ、今日は丸山とアメリカの思想界との交錯についてご紹介されました。

質問は、このような交錯の丸山思想における位置づけはどのように理解したらよいのかということ。基本的に本来の丸山思想の延長線上にあるものなのか、それとも、このようなぶつかり合いを通して新しい問題提起ができたのか。油井先生ご自身は思想史専門ではないとおっしゃられましたので、もしほかの先生に答えていただいた方が良ければそれでもいいと思います。

次に二点目。丸山先生がドイツ思想を中心に学んできたとする、アメリカ思想を中心に学んだ日本人学者と比較して丸山思想の特徴は何かあるのでしょうか。

區さんに対する質問ですが、先ほど私は中国国内における丸山研究を簡潔にまとめましたが、區さんは思想史の研究者として、中国国内だけではなく、台湾や東アジアにおける丸山思想の受容について、どのように紹介され、受け入れられているかについて、少し紹介していただけますでしょうか。

趙星銀さんについての質問ですが、趙さんのお話の中で、「韓国における丸山について語るが、丸山における韓国については語らない」とおっしゃったのですが、さっき申し上げたように、丸山先生が召集されて朝鮮に滞在した経験があり、その経験を活かして植民地主義批判を行いました。丸山の「国籍性」を言う際、それをどのように評価するのでしょうか。

以上です。ありがとうございました。